

令和 4 年 5 月 9 日現在

機関番号：40124

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00899

研究課題名(和文) 第二言語習得研究に基づく効果的な多読プログラムモデルの開発

研究課題名(英文) Developing an Instructional Model for an Effective Extensive Reading Program Based on Second Language Acquisition Research

研究代表者

岩田 哲 (Iwata, Akira)

北海道武蔵女子短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：30789706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は第二言語習得研究の成果をもとに、多読の「読解力」、「語彙力と読みの速さ」、「学習意欲」向上への効果を検証した。主に伝統的な訳読式指導法との比較を行い、多読は5万語以上で伝統的指導法と同等の読解力向上効果が得られ、高頻度語の視認語としての習得および読みの速さ向上もより効率的で、読書量が多いほど速度が向上することが示唆された。また、英語学習の内発的動機づけ向上にも効果的であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多読は、効果的な実践方法等についての情報が十分ではなく、教育現場での導入が進んでいないことから、本研究では、実践方法を具体的に示し、効果も統計を用い数値的に検証した。その結果多読は5万語で従来型指導と同等に読解力を高め、速読力、語彙力については従来型指導よりも効率的であり、学習の動機づけも高めることが示唆された。国際誌や国際学会を通じ、国内外の教育現場へ有用なモデル提示と情報提供になると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Language instruction using extensive reading is now widely recognized by many researchers worldwide. However, it has yet to spread into classrooms, especially in EFL courses, partly because of insufficient information on how to implement it effectively. This study showed a practical model of its implementation and numerically verified its effectiveness using statistics. The results suggest that extensive reading of over 50,000 words improves reading comprehension as much as conventional instructional methodology. It was also suggested that it facilitated reading speed and vocabulary acquisition of high frequency words more efficiently than conventional instructional methodology. Furthermore, it could enhance motivation for learning. The research results suggest that the adoption of ER in an EFL curriculum is a feasible option and will have an impact on educational institutions and practitioners worldwide through international journals and presentations.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語多読 読解力向上 読みの流暢さ 語彙習得 動機づけ向上 グレーデッドリーダーズ

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

政府は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を打ち出し、国民の英語力強化に様々な施策を施しているが、中高生の英語力は国の目標（英検準 2~2 級程度等 50%）に届いておらず、「読解力」、「語彙力」、「学習意欲」に課題があることが示されている（MEXT, 2017）。そしてこの課題は高等教育機関にも共通している。原因の一つに現在の指導法が学習者に英語に触れる機会を十分に提供していないことが挙げられている。その解決方法として、学習者用の英語の本を使った多読があるが、その効果は十分に検証されておらず、広く普及していない。

次期学習指導要領では小学校英語の教科化や、中等教育の指導語彙数増加など大幅な改革が行われる。しかし、著者は公立高校での指導経験から、解決すべき問題点として、教員養成、大きなクラスサイズ、英語に触れる機会の少なさがあると考え、教員の英語運用能力に差があり、英語力にばらつきのある大人数のクラスでも、英語に触れる機会を増加させる解決策として、多読に注目した。多読は、多量の英語に触れる機会を同様に提供する多聴に比べ学習者が適切なレベルのインプットを自ら容易に選択できる点で優れている。多読が普及していないのは、実行可能と思えるモデルが浸透していないためであると考え、日本の学習環境での効果的な指導モデル構築の必要性を痛感した。どの教室でも実行可能なモデルを示せば現場へのインパクトは大きいと考えられる。

豊富なインプットに触れる方法としての多読は、1990年代から英語指導方法として認識されるようになった。学習者向けに使用語彙を制限して作られた本（グレーデッド・リーダーズ）の使用により、自分の英語力に合ったレベルのインプットを容易に選択できることから、学習者の自律性を高める点でも優れていると考えられており、指導方法についても多読 10 原則をはじめとして様々な提言がなされている（Day & Bamford, 2002）。多読のもたらす効果についての研究は多岐に渡り、読解力、読みの速さ、語彙習得、文法力、リスニング、スピーキング、ライティングといった技能面の向上から、学習の動機づけや態度の向上といった情意面についての効果も報告されている（Nation & Waring, 2020）。

教室での多読指導と、同じだけの時間をその他の活動に充て、その効果を比べる研究が数多くなされているが、第一言語（L1）や第二言語（L2）環境の研究が多く、日本の様に外国語として英語を学ぶ環境（EFL）で効果を検証した研究は未だに少ない。その理由として、授業時間を多読に充てることに多くの教員が躊躇する傾向があり、また授業時間のみでは、多読の様々な効果を検証するのに十分とは言い難いことが挙げられる。すなわち授業外の時間も使った多読指導について考える必要があるのである。多読が効果的である可能性を指導者は感じながらも、指導に取り入れるかどうかは、組織的な決定というよりも、個々の教員に任される傾向が強く、日本における多読指導は未だ十分に普及していない。これは日本の中等・高等教育環境で効果的な指導方法のモデルがなく、どの程度行えばどのような効果が得られるかが十分にわかっていないことに起因すると考えられる。本研究は日本の様な EFL 環境で、具体的にどの程度の量を読めばどの程度の効果が、何に対してあるのかという点を示すことで、これまでの溝を埋める研究になり得ると考える。

2. 研究の目的

本研究では、第二言語習得研究における読解、語彙習得、動機づけ研究の成果をもとに、上記の観点に関して、EFL 環境におけるより効果的な多読指導方法を探ることを目的とす

る。文部科学省の調査 (MEXT, 2017) に見られる典型的な日本人学習者 (英検 3 級程度で英語学習意欲が高くない) に対する、効果的な多読指導モデルを開発し、その妥当性を検証するところがこの研究の独創的な点である。多読は多聴と異なり、全員が熟達度にあったインプットを自ら判断し、自律した学習を行うのに適しており、大きなクラスサイズで様々な熟達度の学習者を 1 人の指導者が教える日本の学習環境でも効果を発揮する可能性が大きい。本研究は日本の英語教育の課題克服に向け、教室内外を結び付ける現実的な多読指導モデル構築について、重要な示唆が得られると考えられ、その結果は国内の中等及び高等教育にも大きなインパクトを与える可能性がある。同時に国外の EFL 環境の教室にも示唆を与えるものと考えられる。

本研究の目的は第二言語習得研究の成果をもとに、多読が持つ「読解力」、「語彙力と読みの速さ」、「学習意欲」の向上への効果を検証することにある。具体的には、(ア) 読解力向上に効果を発揮する読書量、(イ) 高頻度語の視認語としての習得と読みの速さの向上、(ウ) 向上する動機づけの種類という 3 つの点に関し、多読の効果を検証する。

3. 研究の方法

(ア) 読解力向上に関しては、非英語専攻の日本人大学生の参加者を、「多読+アウトプット活動」を用いる授業方法と「精読+文法訳読式」の授業方法を用いる精読群に分け、およそ 2 学期間指導し、プレ・ポストテストとしてコース前後に行った市販の読解力測定試験 (GTEC Academic) の結果を比較した。指導法を独立変数、試験の点数を従属変数とし、プレテストの点数を共変量とする共分散分析を行った。多読群は 5 万語以上を読んだグループと 5 万語未満の 2 グループに分け、精読群は 1 グループとした。コース前には英語学習に関するアンケート、コース後には多読に関するアンケートを行い、さらに非公式のインタビューで取り組み状況などを確認した。読書語数は M-Reader を利用して記録したため、読書後のクイズで十分な理解度を確認できた本のみが記録された。(イ) 高頻度語の視認語としての習得と読みの速さについても、多読群と精読群を比較調査した。多読群は 5 万語以上、5 万語未満の 2 グループ、精読群は 1 グループで、3 回の授業時間調査の結果、ほぼ同じ時間学習に取り組んだことが確認された。語彙力の測定には語彙レベルテスト (望月語彙サイズテスト) を利用し、視認語としての語彙を測定するために、試験形式は PC 上で表示される日本語に対応する英単語を 3 つの選択肢から選ぶ形式で、時間制限を 5 秒とした。読みの速さを測定する速読テストは、練習用テキスト 1 つ、本試験用テキスト 2 つを Notou and Teraguchi (2004) をもとに開発し、本実験には参加しない英語専攻学生 4 7 名を対象に、読みの速さと理解度に有意差がなく本試験用テキスト 2 つが同等であることを確認し使用した。およそ 2 学期間のコース前後に語彙レベルテストと速読テストを実施し、グループ内、グループ間の変化を比較調査した。語彙サイズは語彙頻度別に測定し、指導法を独立変数、語彙サイズを従属変数とし、プレテストを共変量とする共分散分析を行った。速読については、各群の読みの速さについて繰り返しのある t 検定を実施し、グループ間の差異を確認するために 1 元配置の分散分析を行った。(ウ) 動機づけ向上については、学習者の英語学習動機づけの変化を自己決定理論の枠組みで考察した。内発的動機付けの他に、外発的動機付けを、同一視的調整、取入れ的調整、外発的調整に分け、さらに 3 つの心理的欲求 (自律性の欲求、有能性の欲求、関係性の欲求) について、Tanaka and Hiromori (2007) をもとにアンケートを作成し、およそ 2 学期間のコース前後に実施した。4 つの動機づけ制御焦点 (内発的、同一視的、取入れ的、外発的) と 3 つの心理的欲求 (自律性、有能性、関係性) の変化と相

関を考察した。

4. 研究成果

(ア) 読解力向上に関しては、日本の短期大学で英語を専攻しない EFL 学習者の読解力向上を、「多読+アウトプット活動」と「精読+文法訳読式」という2つの指導方法で比較した。その結果、精読群 (A) と5万語以上の多読群 (D) には読解力に有意差はなく、精読群 (A) と5万語未満の多読群 (E) では、精読群が有意に好成績を収めたことから、従来型の「精読+文法訳読式」の指導方法と同等の効果を得るためには、5万語の読書が必要であることが示唆された (表1)。また、学習時間が読解力向上に大きな影響を持つことが示唆された。アンケート調査の結果、学習時間のピークは大学入試を主な要因とする大学入学前であり、動機づけと学習時間の維持が重要であることが示唆された。

表1. 読解力の変化

	Pretest		Posttest	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
A (IR: <i>n</i> = 31)	92.13	21.37	88.35	19.14
D (ER: <i>n</i> = 20)	63.2	19.66	58	25.08
E (ER : <i>n</i> = 36)	60.61	22.52	54.44	19.71

(イ) 高頻度語の視認語としての習得と読みの速さについて、非英語専攻の日本人大学生を対象に、およそ2学期間にわたって多読と精読を中心に指導を行ったグループを比較した。多読群は5万語以上読書をしたグループ、5万語未満のグループの2グループ、精読群は1グループとした。参加者はほぼ同じ時間をかけて課題に取り組み、多読群はグレードリーダーズと教科書、精読群は教科書で、主に1k (1,000語)、2k (2,000語) レベルの語彙に接した。コースの前後に行った語彙レベルテストの結果、高頻度語の視認語としての習得は、1k レベルは多読、精読ともに天井効果が確認されたが、2k レベルではすべてのグループで有意に効果があり、多読が精読に比べ有意に伸びたことから、多読が精読に比べ、より効果的かつ効率的であることが示唆された (表2)。3k (3,000語) レベルはすべてのグループがあまり触れる機会のない語彙であったため伸びは確認されなかった。

表2. 語彙サイズの変化 2k (2,000語レベル)

Group	Pre	Post	difference	<i>t</i>	<i>p</i> (two-tailed)	Effect Size (<i>r</i>)
A (IR)	860.80 (107.16)	913.60 (73.65)	52.80	-3.01	.006	.60 Large
D	683.81 (114.48)	761.90 (100.78)	78.09	-3.15	.005	.69 Large
E	649.23 (127.15)	730.77 (115.69)	81.54	-3.67	.001	.72 Large
D + E (ER)	664.68 (121.60)	744.68 (109.24)	80.00	-4.89	.000	.71 Large

読みの流暢さに関しては、多読群、精読群がともに伸びたものの、精読群には有意な伸びは確認されなかった。一方多読群は有意に読みの速さが向上し、多読が精読に比べ有意に読

みの速さを向上させることが示唆された。さらに、多読群の間にも有意差が確認されたことから、読む単語数が多いほど、その向上が大きくなることが示唆された（表3）。

表3. 読みの速さの変化

Group	Pre	Post	Difference	<i>t</i>	<i>p</i> (two-tailed)	Effect Size (<i>r</i>)
A (IR)	79.98 (23.13)	83.61 (22.67)	3.63	-2.02	.054	.41 Medium
D	79.71 (22.43)	95.15 (12.75)	15.44	-4.40	.000	.96 Large
E	73.11 (19.60)	79.42 (22.02)	6.31	-2.58	.016	.50 Large
D+E (ER)	76.06 (21.40)	86.44 (20.27)	10.38	-4.82	.000	.70 Large

(ウ) 動機づけ向上については、EFL 環境で英語力に自信がなく、比較的動機付けの弱い学習者（非英語専攻）を対象とし、多読プログラムが、学習者の英語学習動機付けに与える影響を、自己決定理論の枠組みで調査した。プログラムの前後に同一のアンケートを実施し、一般的な英語学習への動機づけ、4つの動機づけ制御焦点（内発的、同一視的、取入的、外発的）と、3つの基本的心理的欲求（自律性、有能性、関連性）における変化と、相関関係を調査した。その結果、多読は英語学習について、同一視的調整と内発的動機付けを有意に向上させることが示唆された。また、別のアンケートから、多読コースは動機づけが強い学習者に対しても、読書後に充実感をもたらすことが示唆された。

一連の研究結果は外国語として英語を学ぶ教室環境で効果的に多読プログラムを通じて英語力向上を図るモデルになると考えられる。複数の国際誌や国内外の学会で発表を行ったため、国内外で外国語を指導する教員や教育機関に示唆を与えられるものと考えられる。

<引用文献>

- Day, R., & Bamford, J. (2002). Top ten principles for teaching extensive reading. *Reading in a Foreign Language, 14*(2), 136-141.
- Nation, I. S. P., & Waring, R. (2020). *Teaching extensive reading in another language*. Routledge.
- Notou, S., & Teraguchi, H. (2004). *Sonic reading stage zero starter*. Kiriharashoten.
- Tanaka, H., & Hiromori, Y. (2007). The effects of educational intervention that enhances intrinsic motivation of L2 students. *JALT Journal, 29*, 59 - 80.
<https://doi.org/10.37546/JALTJJ29.1>
- 文部科学省 (2017). 「平成29年度英語力調査結果（高校3年生）の概要」
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 岩田 哲	4. 巻 39
2. 論文標題 図書館と連携した英語多読授業の取り組み (Implementing an Extensive Reading Program: Working Together with the Library)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 短期大学図書館研究 (Journal of Junior College Libraries)	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akira Iwata	4. 巻 19
2. 論文標題 Self-Generated Elaboration versus Traditional List Learning in Foreign Language Vocabulary Retention	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 HELES Journal	6. 最初と最後の頁 4-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akira Iwata	4. 巻 20(1)
2. 論文標題 How Extensively Do We Need to Read to Improve EFL Reading Ability?: A Comparison of Two Different Instructional Methodologies	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Reading Matrix: An International Online Journal	6. 最初と最後の頁 66-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akira Iwata	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 The Effectiveness of Extensive Reading (ER) on the Development of EFL Learners' Sight Vocabulary Size and Reading Fluency	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 The Reading Matrix: An International Online Journal	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akira Iwata	4. 巻 34(2)
2. 論文標題 An Extensive Reading Program As an Educational Intervention in an EFL Classroom	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Reading in a Foreign Language	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計6件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 岩田 哲
2. 発表標題 図書館と連携したアクティブ・ラーニング～英語多読授業の取り組み～
3. 学会等名 私立短期大学図書館協議会北海道地区協議会令和元年度研修会 (招待講演)
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Akira Iwata
2. 発表標題 Is Semantic Elaboration Better than the Traditional Method on Vocabulary Learning?
3. 学会等名 第45回全国英語教育学会 (JASELE) 弘前研究大会
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 岩田 哲 (Akira Iwata)
2. 発表標題 Is it effective to use L1 semantic elaboration for L2 vocabulary learning: A pilot study
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2018年～2019年

1. 発表者名 Akira Iwata
2. 発表標題 Effects of Extensive Reading on Reading Comprehension and Reading Rate for EFL College Students
3. 学会等名 第46回全国英語教育学会長野研究大会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 Akira Iwata
2. 発表標題 How Does an Extensive Reading Program Improve EFL Students' Motivation to Learn English?
3. 学会等名 British Association for Applied Linguistics 2021 Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 Akira Iwata
2. 発表標題 An Extensive Reading Program for the Acquisition of Sight Vocabulary and the Facilitation of Reading Fluency
3. 学会等名 第47回全国英語教育学会北海道研究大会
4. 発表年 2022年～2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------